古典籍の利用者が守るべきこと

1　手を洗うこと。

理由　手の油や汚れ→シミ、死番虫、ゴキブリ、黴の栄養源

＊衣類と同じで、洗濯しないと虫がつきやすい

◎図書館→手洗いの場所がわかるように

→手袋の用意　☆手の油や汚れが付着しない

▼新しいものを用意しなければならないことがある

＊誰が使用したかわからない手袋は気持ち悪い

→洗濯や購入の問題

▼手袋をして版本をめくると、めくりにくい

→余計な力がかかる　→本が傷む

◎関連する厄介な問題

・手を怪我している人の利用

・本を汚したり、傷つけたりするほど爪の長い人の利用

→閲覧を断れるか？

2　利用する本の冊数、破損状況の確認を事前におこなう

理由　やった、やらないのトラブルの防止

◎図書館→破損などがあるなら、その状況を記したメモを作成しておく

例　題簽剥落、糸切れ、三丁め落丁

3　筆記用具は鉛筆を使うこと。

理由　万年筆、ボールペン　《使用禁止》

→取り去ることの出来ないインクをつけないため

シャープペンシル　《使用禁止》

→折れた芯が、細く、小さいため、本の間に入ってもわかりにくい

消しゴム　《使用禁止》

→消し滓が本の間に入ってもわかりにくい

◎図書館→鉛筆（ＨＢか２Ｂがよいと私は思います）を用意

特別閲覧室以外に鉛筆削りを用意

→携帯用の鉛筆削りは、汚れてもいい場所で使用させること

赤・青鉛筆はどうするか？

4　閲覧のさいの注意事項

ａ本は、【指をぬらさず】、【指サックなどを使用せずに】、丁寧にめくること

＊貴重書は、机の上に置いたままでめくること

もちあげて、本をそらしてめくると、めくりやすいので、楽する人がいる

→糸切れなどの原因になりうる

ｂ本を押し広げてみないこと　→撮影の時は？

ｃ本は開いたまま伏せないこと

ｄ開いた本の上に、他の本をかさねないこと　→重ね写し（トレース）も当然禁止

5　本の原形を維持すること
　a 折ったりしないこと
　b 貼り紙をはがさない
　c 畳物など折り目を変えない
6　書き込み厳禁
7　ポストイットなど、糊の着いた付箋の使用厳禁
　◎図書館→和紙の付箋を用意
　　コピー用紙を適当に切ったものを使用すると、時間がたつと色が変わり、それが本に移ることがある。
　　＊本にはさみ忘れていないかの確認のため、できたら和紙の付箋は枚数を決めて貸し出し、返却の時に枚数を確認したいところ
8　金属製のメジャーの使用禁止
　◎図書館→ストッパーのついていない、ビニール製のメジャーを用意
9　撮影は業者へ

原本を損なわないために、直接利用させない工夫
・書誌調査が必要な研究はともかく、内容の研究であれば、原本をみなくてもいい。
　→撮影して、マイクロフィルムによる閲覧（都立中央図書館他）、
　　プリントアウトしたものの閲覧（福井市立図書館他）
　　複写はそれをコピー
　＊関連して
　　デジタルカメラ、およびそれ用の撮影台を用意し、メモ的なものは、それによる撮影を許可する。それを規定の料金でプリントアウトさせるか、デジタルデータの持ち帰りを許可する。
　＊個人的には
　　楮を料紙としている本は、数度のコピーやスキャンに耐えられないほど弱くない。
　　→コピーした本を閲覧用に作成すればいい
　　ただし鳥の子を料紙としたものは折れたり切れやすいので例外
　　極彩色の絵はコピーで色が悪くなる可能性があるので例外
　　蔵書印は印肉を使用する。スタンプはにじむなどしてよくない。

保存のために

1　保管場所

高温・多湿は、虫や黴が発生しやすい

＊温度２０度、湿度５５％が適当の目安とされている

＊桐箱がよいとされた

2　殺虫・防虫

殺虫（強）→ガス燻蒸。

＊虫が死ぬガスを吸って健康によいわけがない。

→電子レンジ（中野三敏先生の提案）

ラップで包み数十秒、最大５０秒

註　傷んだという報告事例あり、注意

殺虫（弱）→虫干し　春・秋の乾燥した日の陰干し、風通し

＊梅雨明けの晴れた日とする説もある

＊死番虫は、本の外に追い出せば死ぬ

状態が悪くない本ならば幼虫はドライヤーの弱風で追い出せる

成虫は五、六月頃に飛び回り産卵。

→ゴキブリ・ダニアースで部屋ごと燻煙。本の中までは無理か？

防虫（弱）樟脳→防虫香（市販・白檀の香り）

防虫（中）パラゾール

防虫（中）ナフタリン→ナフタリンペーパー

＊樟脳、パラゾール、ナフタリンは一緒に使用しないこと